慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 社会思想としてのアメリカ都市社会学 : 「アメリカ都市研究」の知識社会学的研究 |
| Sub Title | American urban sociology as a social thought : the study of urban sociology through the perspective of sociology of knowledge |
| Author | 藤田, 弘夫(Fujita, Hiroo) |
| Publisher | 三田哲學會 |
| Publication year | 1978 |
| Jtitle | 哲學 No.67 (1978. 3) ,p.65- 90 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | Urban Sociology in Japan is heavily influenced by Urban Sociology of America. In Japan, Urban Sociology has become a very important field of study. However, if it is said, today it is facing, in a sense, a deep crisis. This paper attempts at-explaining the present crisis of Urban Sociology in Japan as a result of infiltrations of certain unique characteristics of American Urban Sociology into the Urban Sociology of Japan : i) American society and its sociological thought ; ii) American cities and the characteristics of urban sociology ; and iii) The European reaction to American sociology and American reflection to it. Concluding from the above discussion, the natural scientific, empirical, pragmatic, positivistic characteristic of American Urban Sociology has placed importance on primary research at down-to-earth conditions of American cities. The main problem of Japanese Urban Sociology lies in the fact that it imported in an unprecedented speed the American Urban Sociology without giving due attention to the social thought lying behind it. |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000067-0065 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 社会思想としてのアメリカ都市社会学

## ——「アメリカ都市研究」の知識社会学的研究——

藤　田　弘　夫*

# American Urban Sociology as a Social Thought

## —The study of urban sociology through the perspective of sociology of knowledge—

*Hiroo Fujita*

Urban Sociology in Japan is heavily influenced by Urban Sociology of America. In Japan, Urban Sociology has become a very important field of study. However, if it is said, today it is facing, in a sense, a deep crisis. This paper attempts at explaining the present crisis of Urban Sociology in Japan as a result of infiltrations of certain unique characteristics of American Urban Sociology into the Urban Sociology of Japan: i) American society and its sociological thought; ii) American cities and the characteristics of urban sociology; and iii) The European reaction to American sociology and American reflection to it. Concluding from the above discussion, the natural scientific, empirical, pragmatic, positivistic characteristic of American Urban Sociology has placed importance on primary research at down-to-earth conditions of American cities. The main problem of Japanese Urban Sociology lies in the fact that it imported in an unprecedented speed the American Urban Sociology without giving due attention to the social thought lying behind it.

* 慶應義塾大学商学部講師（社会学）.

## (一) 問題の所在

わが国における最近の都市に関する研究は実におびただしいものがあるといえよう．都市社会学としてだけでなく「地域社会論」，あるいは「コミュニティ論」と題され毎年生み出される都市に関する報告書や研究書の数は，以前とは比較にならないほど膨大な数にのぼっているのである．社会学者達は都市研究をがっしりと自己の研究分野のなかに組み込んだのである．今やわが国の都市社会学は社会学の数多くの研究分野のうちでも，最も有力な連字符社会学としての地位を確保したといっても過言ではないだろう．

しかしこうした膨大な調査資料の蓄積と研究成果の累積とのなかで，都市社会学の研究は一種の閉塞状況に落ちいっているのである．都市社会学は現在，危機にあるとさえいわれている[1]．本稿はこうした観点から，現在都市社会学の直面しているこの閉塞状況の一端が，わが国の都市社会学の成立過程に由来する独特の学問的事情から生じるものであることを論じようとするものである．

わが国の都市社会学の特徴は，なんといってもアメリカからの強い影響だろう．これには第二次大戦後の社会学が一般に強くアメリカ社会学の影響を受けてきたことにも増して，都市社会学自体が今世紀初頭のシカゴにおいて，パーク (R. E. Park)・バージエス (E. Burgess)・マッケンジー (R. McKenzie) 等によって，すぐれてアメリカン・サイエンスとして成立していたことがあげられるのである．都市社会学は社会学の諸分野のうちでも，とりわけ強くアメリカからの影響を受けながら成立してきたのである．

第二次大戦の敗北に伴ない戦前ドイツ社会学の強い影響下にあったわが国の社会学者達は，戦後怒濤のように流れ込んできたアメリカ社会学を，

積極的に導入しようとしたのである．戦後のわが国の新しい出発にあたって，実用的なアメリカ社会学はきわめて新鮮で可能性に満ちた科学だったのである．同時に，戦後の日本が顕在化させていたさまざまな社会問題は，社会学者達にプラグマティックなアメリカ社会学的研究を要請していたのである．社会学は戦前の社会学論を中心に研究が進められた段階から，社会問題を具体的に経験的に捉えるものとなっていった．ここに社会調査を武器として，社会問題に積極的にとり組む都市社会学は社会学的研究の一つの焦点となったのである．日本の都市社会学は戦後大きな期待を担って，その研究の幕を開いたのである．

当時都市研究を志した社会学者達の関心の的となったのは，当然シカゴ学派の人間生態学（Human Ecology）であった．日本の都市社会学者達は，この人間生態学を導入しながら，シカゴ学派の研究者達が好んでとりあげてきた都市の病理的現象に，その研究対象を求めていったのである．都市社会学はその後「スラム」等の都市の病理現象に続いて「町村合併」「町内会」「都市化」等に新たな研究対象を求めながら研究を進めてきたのである．これらのなかで，都市社会学者達だけでなく他の分野の社会学者の関心をも集めたのが，経済の高度成長とこれに伴なう急激な人口の都市集中がみられた昭和三〇年代以降の都市化であった．日本社会学会は昭和三六年に「都市化の理論」をシンポジウムでとりあげている．ここで問題となったのが，ワース（Louis Wirth）のアーバニズム理論（Theory of Urbanism）であった．そして，この時期にわが国の都市社会学は，その本格的な展開にいたるのである．

しかしこうしたアメリカの影響下に進められたわが国の都市研究は導入以来わが国の社会科学全体に大きな力をもち続けている，マルクス主義の立場にある社会学者達を刺激した．マルクス主義からの都市研究はアメリカの都市社会学と，その影響を受けたわが国の都市社会学への批判のなかから，次第に自己の立場を確立しはじめたのである．島崎稔，北川隆吉の

両氏によって編集された『現代日本の都市社会』は，マルキシズムの側からの組織的な都市研究の誕生を告げるものであった．

こうしたなかで日本の都市研究はその後，方法的困難の多い人間生態学理論やアーバニズム理論を次第に研究の背後に押しやり，現実の都市内部の構造分析を進めるべく，もっぱら経験的・具体的研究を行ってきたのである．ここにわが国の都市研究もアメリカ都市社会学の直接的な影響から脱却し，ようやく一人立ちできるようになったのである．アメリカの都市社会学が，そのままのかたちで輸入されることもなくなった．日本の都市社会学も「都市社会学とは何か」という問いに対する答を模索している段階から，現実の都市を分析するだけの力量を保持できるようになったのかもしれない．このことは同時に，戦後都市社会学の出発にあたって課題とされてきたアメリカ都市社会学の，日本なりの消化が一応終ったことを意味したのである．

昭和二六年の創刊以来アメリカ社会学の紹介・導入のために大きなスペースをさいてきた『社会学評論』も，アメリカ社会学に直接言及することは少なくなってきた．同時に，アメリカ社会学の研究書の出版も，以前ほど盛んではなくなってきた．だが，このことはわが国においてアメリカ社会学への関心が低下したことを決して意味するものではない．むしろ現在のわが国のほとんどの分野の社会学者達にとって，アメリカ社会学の動向はあえて紹介されるまでもない一般的な知識となっているのである．

こうしてアメリカ社会学の強い影響のもとに成立したわが国の都市社会学は，その隅々にまでアメリカ社会学の影響が滲み出ているといっても過言ではない．しかし現在わが国の都市社会学は，先に指摘したように一方で都市社会学の危機という重大な局面に直面しているのである．本稿はさらにこうした観点から，現在日本の都市社会学がかかえる危機の一端が，アメリカ都市社会学の無反省な導入から生じているものであることを明らかにしたい．このためわれわれはまず，アメリカの都市社会学が培われた現

実のアメリカ社会と，その社会学思想の知識社会学的検討を行ってみよう．

## (二)　アメリカ社会と社会学思想

アメリカ社会の特徴は何といっても，その多様性であろう．どの社会も決して単純に説明できるものでないことは当然のこととしても，アメリカの多様性は世界の他の諸国と比較しても特異な性格を示すものなのである．建国後わずか二〇〇年を経過したにすぎないアメリカは現在，世界最大の国としての地位を築あげるにいたった．しかもこの国は，きわめて多種多様な民族によって構成されているのである．国家が単一の民族によって構成されているわが国が例外的な国家であるとしても，アメリカほど雑多な民族をかかえる国は世界でも珍らしいであろう．国家が複数の民族によって構成されることの多いヨーロッパにおいてすらも，通常それは特定の支配的な民族と辺境の二三の少数民族からなっているのである．アメリカの場合もアングロ・サクソン(W. A. S. P.)が支配的な民族となっている点では，他の国とさほど変わならいものの，小数民族の種類とそのあり方は実にさまざまなのである．とりわけこの点では，アメリカ社会の複合性は島国としてきわだった同質的文化を形成しているわが国と，対照的な性格を示しているといえよう．

しかもアメリカの場合アングロ・サクソンを含めて，きわめて近い時期の移住者とその子孫からなりたっているだけでなく，さらにこれらの移住者達が，イギリス・フランス・アイルランド等に限らず，アフリカ・南ヨーロッパ・東ヨーロッパ，はたまたさまざまなアジア人まで，実に多彩な人々を含んでいるのである．アメリカ社会はこれらの人々が新しい生活を求めることによってなりたっている，文字どうり Melting Pot of Cultures の国なのである．

遠く祖先の地を離れ新大陸にやってきた人々とその子孫達にとって，それぞれの文化は思い出のものではあったとしても，そのままのかたちでは

生活の武器とはならなかった．彼らはそれぞれの場所での生活のなかから新しい文化を築きはじめたのである．彼らが必要としていたのは，日常生起するさまざまな社会問題を直接解決する手段だった．彼らにとっての社会的知識とは，生活が営まれるまさにその場で経験的に獲得されるものであって，決して過去の知識の累積のなかから生み出されるものではなかったのである．

アメリカ人にとって社会とは既に存在しているものではなく，何よりも自分達が創り出すものだったのである．ここではそれぞれが神によって約束された社会実現のため，その可能性を追求していったのである．ピューリタン達の信仰が未だ力強く残っていたのである．そしてこの信仰がかたを変えたのが，スペンサーの社会進化論であり，社会学はその要求に答える一つの科学だったのである．

アメリカにおける社会学の講座は，その場その場のコミュニティがかかえる社会問題を解決するため州立大学にもうけられていった．同時に女子大学は，それぞれの社会問題に社会事業の研究というかたちで答えていった．こうしてアメリカ社会学は農村研究のなかから生み出されたのである．つまり社会学者にとって要請されていたのは，コミュニティに日常生起するさまざまな社会問題をプラグマティックに解決することであり，彼らに必要とされたのはそのための「実用的」なゆえに「科学的」研究方法だったのである．

しかしアメリカにおいては多様な社会の実相を反映して，実におびただしい種類の社会学が並存しているのである．むしろアメリカでは，それぞれのコミュニティで当面する社会問題の研究に，社会学の名はあとからつけられたものであった．彼らにとっての社会学とは，社会問題にどう答えるかであって，その答は自己の直接的経験に基礎づけられることによってのみ可能だったのである．アメリカ人にとってヨーロッパの社会研究をふり返ることは，自分達が新たな出発をする以前に培われた歴史的世界に足

を踏み込むことになる．このことは同時に，未来の約束された土地がもたらす可能性を疑うこととなり，それぞれの集団の個性が優先する危険を意味したのである．彼らにとって必要なのは各民族の歴史的世界をふり返ることではなく，約束された土地での明日の生活だったのである．

こうしたアメリカ人の関心を象徴するものは新聞であろう．アメリカにおける新聞は彼らの興味にしたがって，遠方での大事件よりも，それぞれのコミュニティでの身近なニュースを中心に編集されるのである．彼らの関心は，あくまでコミュニティの事柄だったのである．

したがって彼らにとって，過去の社会研究やヨーロッパの社会研究は研究の対象とされるべきものではなく，自己の研究のほんの出発点をなすにすぎないものだった．まして過去の研究から演繹的に導びかれる「理論」研究は，自分達の経験を離れそれぞれの集団を歴史的世界に誘う「思弁的」なものとして不信の念をもたれた．「社会学理論」は社会学的研究の指針を示すものでしかなく，決して「原理論」まで高められるものではなかったのである．ここでは「社会学とは何か」といった認識論的問題は最も不毛な問として退けられるべきものなのである．つまり社会学にとって，理論は研究の入門の役割を果すものでしかなく，本来の研究はあくまで，社会現象を経験的に捉えるところに成立するものだったのである．オグバーン (William F. Ogburn) はいう，「過去においては違大な社会学者は社会理論家達であり，社会哲学者達であった．しかしこれからは，そういったことはないであろう．社会理論と社会哲学は科学的社会学の諸分野において，衰退していくだろう．というのも社会理論は十分な資料に基づいていないからである．もちろん広汎な調査の総合は理論といえるかもしれない．しかしこのような総合は証拠に基づいているのである．これは古い言葉に対する新しい意味である．しかし今までの社会理論は，大部分が時代精神 (Zeitgeist) の形をとって発展した気ままな思索の産物であったのである[2)]．」．オグバーンのこうした社会学観は，何よりもアメリカ社会学

者達の社会学観を代表するものであったのである．

人種も文化も異なる人々が織りなすアメリカの社会現象は，研究者達に当面の問題を単純化するために，その精神の内容よりも直接観察可能な行動を強調させていった．人々の行動こそが，研究の出発点として最も確実なものとなっていたのである．そして研究の「客観性」は何よりも，この行動を「経験的」に捉えることによって得られるものであった．この際「理論的」(Theoretical) という言葉は，軽蔑的な言葉としてすら使用されたのである．このことは同時に，アメリカがその複雑な歴史的存在としての意味を問われることなく，社会を単純に個人の行動やその心理に還元することが可能な未だフロンテアの社会であったことを意味するのである．

したがってアメリカ人にとって必要なのは，彼らが創造する「理念の共和国」に向って人間本来の可能性をさぐることであって，その研究は古典的研究の解釈からではなく，素朴な態度で当面する社会問題に取り組むことであった．ここでは民族的・歴史的・階級的観点が研究に流れ込むことが極度に嫌われたのである．そのため「自然科学的」な態度で社会研究に臨むことが必要とされたのである．そして研究の「客観性」は，この経験性を正しく捉える「調査技術」によって保障されるべきものであった．研究の直接的な「実用性」は「科学的」であることの証明ですらあったのである．つまり「実用的」，「経験的」，「自然科学的」研究が客観的な「科学的社会学」の研究だったのである．そして社会学者達は経験性を客観的に捉える調査技術を競合うのである．こうして行われていったアメリカ社会学の技術化は，社会の理論化を伴なうことなく進んでいったのである．

つまりアメリカ社会学は，さまざまな集団が自由と平等のもとにより良き生活を求めて，お互いに競い合うことが可能だとする予定調和的思想を生み出す社会的現実を基盤として形成されたのである．約束された社会実現へと進んでいくアメリカ人にとって，歴史は「意味の世界」ではなく「進化の過程」を示すものでしかなかった．彼らにとって必要なのは進化

の最高水準まで登りつめることであり，このための知識はそれぞれのコミュニティでの生活体験から経験的に得られるものであったのである．

アメリカ社会は第一次大戦後急速な都市化を迎える．アメリカにおける社会問題はすぐれて都市問題となって現われたのである．ここに都市は農村に代ってきわめて経験的に捉えることのできるアメリカ社会学にかなった新しい研究対象となった．都市はアメリカ社会学にとって，恰好の研究の舞台となったのである．

## (三)　アメリカの都市と都市社会学

アメリカにおいて第一次世界大戦とそれに続く1920年代の経済の高度成長は，地域構造にも大きな影響を与えた．都市における工業部門の急激な発展と農村での機械化の進行は，農村人口を急速に都市へと集中させたのである．しかも都市へと移住してきたのは W. A. S. P. を担い手として形成されていたアメリカ文化に，比較的溶け込みにくかった新しく移住してきた南ヨーロッパや東ヨーロッパの移民達であり，後には南部の綿花地帯にいた黒人達であった．都市はアメリカの拠点としての性格を著しく高めると共に，少年非行・売春・アルコール中毒・人種問題・不適応移民等の社会病理現象が噴出していたのである．スラムはこれらの犯罪が集中したところであった．なかでもこうした社会病理現象が最も顕著に現われた都市が，発展する西部への拠点シカゴであったのである．

こうしてシカゴ大学の社会学者達は，日毎に激化する都市問題解決のための研究を要請されていたのである．ここにヨーロッパの留学から帰国したパークが，人間生態学を方法論とする都市研究を提唱するのである．パークの人間生態学はダーウィンの生物学の社会へのアナロジーを軸にしながらも，スミスの経済学・コントやスペンサーの社会学・ラッツエル (F. Ratzel) の地理学等が雑然と混入したままのものであった[3]．パークはバージエス・マッケンジー等の協力者を得て，人間生態学を整備すると共に，

シカゴがかかえる都市問題に取り組んでいったのである．彼らにとって，都市構造はさまざまな社会学的現象の背後にあるものとして考えられ，生態学はここにたどりつくための最も良いルートを提供するものだったのである[4]．こうしてシカゴの社会学者達はこの人間生態学理論に基づいて，さまざまな都市問題解決のためにおびただしい調査を開始するのである．

ここでは社会調査とは，行政的・教育的・改良的目的をもって特定のコミュニティを包括的に探究することにあった[5]．つまり彼らにとっての調査は，ただ単に現状把握にとどまるものではなく，すぐれて実践的性格をおびたものだったのである．シカゴのそれぞれの機関も，こうした性格を示す社会調査に惜みなく，その研究資金を注ぎ込むことができたのである．こうしてシカゴの社会学者達は都市を社会の実験室（The City as a Social Laboratory）として，さまざまな都市問題に積極的に取り組んでいった．ここにシカゴ学派の都市研究は，その黄金時代を迎えるのである．

しかしこのようにして次々に着手された膨大な社会調査から，都市に関する知識が累積的に発展することはなかった．むしろ彼らはそれぞれのコミュニティがかかえる社会問題に，きわめて実践的な関心から，その社会現象の記述と統計的処理に終始することで対応していったのである．同時にこれらの調査を通じて，あまりにも粗雑な人間生態学理論への疑問が出されていった．つまり経験的な個別事例研究の徹底化は，一方でアプリオリな人間生態学への不信念をつのらせていったのである．こうした都市調査に再び研究の指針を与えるべく登場したのが，ワース（Louis Wirth）のアーバニズ理論（Theory of Urbanism）であった．アーバニズム理論は都市コミュニティの研究を，従来の人間生態学だけを方法論とする狭い視角から，人間生態学を基礎としながらも社会構成（Social Organization）や社会心理（Social Psychology）までも直接研究の視野に収めようとする点で，画期的なものであった．以後アーバニズム理論は，その著しい理論

的未整備にもかかわらず，今日にいたるまで都市社会学を代表する理論となっているのである．

アーバニズム理論以後の都市研究は実践的な都市問題を扱いながらも，賛成するにしろ反対するにしろ多くのものが，このアーバニズム理論の諸命題に方向づけられていったのである．だが，アメリカでの都市研究は，あくまで現実の都市が生み出す社会問題に対して「経験的な調査」を通じて行われていったのであって，都市の理論構成は二次的・三次的なことでしかなかったのである．とはいってもワース以降現在まで都市の理論構成が行われなかったわけではなかった．人間生態学はホーリー (Amos H. Hawley) やクイン (James A. Quinn) 等によって整備される一方，都市のまったく新しい理論構成としてはショーバーク (Gideon Sjoberg) やワレン (Roland L. Warren) の試みが存在のである．しかしながら現在なおアメリカの都市社会学者達は，ショーバークのいうように「まず第一に資料集めに関心をもっており理論的なシステムを構成する意図をもっていない[6]．」とすら考えられるのである．

アメリカにおいて都市社会学だけでなく，農村社会学やその他さまざまな地域研究に，しばしばその理論的枠組を提供したのがコミュニティであった．しかしこのコミュニティの概念のもつあいまいさはことあるごとに指摘されてきたのである．最近においてもニュービー (Haward Newby) とベル (Colin Bell) は，「コミュニティの研究に関する主要な問題の一つは，コミュニティがそれ自体で，実質のある社会学的理論をほとんどもっていないか，あるいはまったくもっていないということである．」このことは「ほとんどのコミュニティ研究が，累積的なものではなかったことを反映しているのである．コミュニティ研究は社会学に多大な貢献をしてきたといわれているかもしれないが，それらは実際にはあまり貢献しなかったのである[7]．」というのである．われわれはこうした無理論的性格を示すアメリカの都市研究に直面して，これらの研究の背後にある現実のアメリカの都

市を見てみよう．都市社会学は何よりも，この現実の都市がかかえる社会問題に答えようとするものだったはずである．ここでは紙幅との関係で，これを一応現在のアメリカの都市の特徴を最も典型的に現わしていると思われる，都市の統治形態に焦点を絞って窺ってみよう．

多様なアメリカ社会にあっては，都市も複合的な統治形態を示す．わが国の場合，都市は東京と特別市とその他の都市との間できわだった行政組織の相違があるものの，これ以外では都市のあり方がさほど異なるわけではない．これに対してアメリカでは州と各種の自治体の関係は，きわめて多様なものとなっているのである．アメリカにおいては都市のもつ行政権限の範囲が州ごとに異なるばかりでなく，都市の統治形態そのものまでが実に多様な形態をとりながら存在しているのである．

この都市の統治形態を類型化すると，まず第一に最も一般的な市長·議員が共に直接選挙で選ばれ，それぞれが行政と立法とを担当する「市長—議会」型があげられる．ただしこの市長—議会型は市長のもつ行政権限の強弱によって，大都市に多い「権限の強い市長」型と中小都市に多い「権限の弱い市長」型とに区分される．次に政治と行政が分離され，議会が市の行政に責任をもつ支配人（Professional Manager）を任命する「議会—支配人」型がある．この型の都市は，郊外の中小都市を中心に最近急速に増加するにいたったもので，議会が政治上のすべての責任を負うと共に，支配人を解任する権限をもつのである．そして支配人は議会の定める範囲内で完全に市の行政を監督・指示するのである．また直接選挙によって選ばれる数名が委員会を構成し，この委員会が立法と行政に関する全権を保持する「委員会」型の都市がある．この型の都市においては，通常五名からなる委員が立法機関になり，行政に関しては五名のそれぞれの委員が市のそれぞれの担当の部門に責任をもっているのである．この他には，ニューイングランドの小都市を中心にしてアメリカの都市の原型ともいうべき統

治形態を示す「タウン・ミーテイング」型の都市がある．

しかしこれら四つの基本的類型の外に，最近サンフランシスコ・ニューヨーク・フィアデルフィア等の大都市において，強い権限をもった「市長—議会」型と「議会—支配人」型とを組み合せた「市長—行政管理」型ともいうべき統治形態が採用されはじめているのである[8]．これがごく大ざっぱに類型化した都市の統治形態であるが，アメリカの都市の統治形態の解明には，これらの類型にさらにさまざまな下位類型すら必要とされるのである．同時にこれらの統治類型は決して固定的なものではなく，それぞれの類型のあいだでの移行がひんぱんに見られると共に絶えず新い統治形態が生み出されるのである．

こと都市の統治形態に限ってみても，このように多様な姿をとりながら存在しているアメリカの都市においては，ここで生じている社会現象を分析し，その包括的な理論化を試みることは容易なことではなかった．ここにヨーロッパから帰国したパークが，日毎に激化するシカゴの都市問題に直面して，生物有機体から人間社会へのアナロジーを軸とする素朴なしかし単純な人間生態学による都市研究を提唱する背景があったのである．またパークやワースの都市理論において，生態学や心理学が強調される一方，行政組織の理論化がほとんど見られないのも，アメリカの都市の統治形態のこの多様性にあったのである．

人種も民族も，そして統治形態すらこのように多様な姿をとって現われるアメリカの都市においては，どんなに些末に思える都市問題であろうと，それをどのように解決していくのかが常に大きな問題となったのである．日毎に生起する都市問題解決のためまず必要だったのは，人々の合意(Consensus)であった．ワースはいう，「私は合意の研究を社会学の中心的な仕事だと見なしている．それは人間の行動が集団生活によって影響される限りにおいて，それを理解することにある．どんな社会の目標もその構

成員が相互に理解し，共通の目的に向って，かつ共通の規範のもとに協力して行動する能力の増大にあるのだから，合意の分析は当然社会学的探究の焦点をなすのである.[9)]」ワースのこの言葉に象徴されているように，アメリカにおいて，合意の問題は，ただ単に都市問題の研究にとどまらず，社会問題研究の中心課題だったのである.

同時にアメリカの都市においては，たとえそれが原因を等しくする社会現象であっても，統治形態に典型的に見られるように，現実の都市の多様性に対応して,表面的にはさまざまな都市問題となって現われたのである. そして都市研究の実用性の観点からするなら，それぞれの都市における都市問題のあり方のこの微妙な違いが実は大きな意味をもっていたのである. したがってアメリカの都市研究において，人間生態学やアーバニズム理論等は都市を大ざっぱに把握するにとどまり，都市の社会的現実は経験的な個別研究をまってはじめて把握されるものであった. つまり多様な姿を示すアメリカの都市にあっては，都市の理論構成はいきおい緻密なものとはなり得ず，社会的現実の解明は何よりも社会調査による事実発見 (Fact Finding) によってなされていったのである.

しかしこの社会調査が大規模であればあるほど，またその調査に精密さが要求されればされるほど，このための多大な費用は行政機関の資金援助にたよらざるを得なかったのである. したがって都市研究もいきおい資金援助機関に対して，研究成果の実用性を強調したのである. そしてこの研究の実用性の強調が，行政機関の評価をもたらし，この行政機関による評価が膨大な費用を必要とする次の調査を可能なものとしたのである. こうして都市研究は都市社会学者の学問的関心というよりは，調査のために研究資金を投じた行政機関の政策的要求によって進められたのである. 同様にして全国的な社会的研究は，その資金提供者である政府機関の意向と関心に沿って，おびただしい個別事例の単純な総合か，基準メッシュやS. M. A. (Standerd Metropolitan Area) 統計区による比較的扱いやすい

社会現象の統計的処理によってなされたのである．こうして都市社会学研究は学問的研究というより，都市行政に伴なって生じる事務という性格を強くしていったのである．

このように多様な姿をとって現われるアメリカの都市の研究において，調査技術だけが研究者達にとって普遍的なものとなっていたのである．ここに都市の「調査技術」は都市の「社会学理論」の構成に代って，都市社会学の表舞台に登場してくるのである．つまりアメリカ都市社会学はすぐれて「実践的」な関心の基に，「経験性」の強調と，これを捉えるための「調査技術」の精密化を軸として展開されてきたのである．

## (四)　ヨーロッパ学者の目に映じたアメリカ社会学とアメリカの社会学者の自己反省

では，こうした性格を示すアメリカ社会学とりわけ都市社会学は，ヨーロッパの学者達にどのようなものとして捉えられていたのであろうか．第一次世界大戦は世界におけるアメリカの地位を大きく浮上させた．ヨーロッパ人にとってアメリカはもはや自国民の移民先としてだけでなく，世界における最も重要な国として登場してきたのである．同時にアメリカ自身も，もはや伝統的な孤立をいやがうえにも維持できなくなるほど，巨大な勢力となっていたのである．大戦後のヨーロッパはアメリカとのかかわりあいのなかから，復興の糸口を見い出していくのである．ヨーロッパ人はアメリカとの数々の交流を通じて，アメリカの学問にも目を開いていくことになるのである．

この場合アメリカンサイエンスとまでいわれた社会学は，ヨーロッパの学者達にとって特異なものとして注目を集めたのである．アメリカ社会学は，同じ社会学という名で知られるヨーロッパの学問とは大きく異なったものであった．「実用性」と「経験性」をこれほどまでに強調した学問は，ヨーロッパには存在しなかったのである．マンハイム (Karl Mannheim)

は，この経験的で実用的な性格をもつアメリカ社会学に，ドイツ社会学が多くのものを学ばなければならないとしながらも，アメリカ社会学の欠点として，1. 研究対象の断片的限定と社会的認識における無理論的性格，2. 哲学や形而上学への不信に基づいたと思われる理論に対する禁欲的態度，3．包括的な一般理論への勇気の欠如，4．知識社会学的視点の欠如，等を指摘するのである.[10)]

しかしこうした見方は何もマンハイムに限らず，ヨーロッパの学者が少なからず抱いたアメリカ社会学の印象だったのである．こうしたアメリカ社会学の特徴は，何よりも都市社会学の研究に端的に現われていたのである．ゾンバルト (Werner Sombart) は既に黎明期のシカゴ学派の都市研究に対して，「アメリカの都市社会学はこの統計的集団について観察されるところの，きわめて多種多様な特徴を列挙しながら『都市的環境における人間行動の研究』(パーク) に従事している．しかしながら，アメリカの都市社会学者が実際にやっていることは，科学的な研究に使われる基礎的な資料をただ単に集めることではないか．もともと利用可能な資料とは，理論的に整備された効果的な視点に立って，はじめて蒐集できるはずのものである.[11)]」として疑問を抱くのである．当時のアメリカを旅行したオランダの文化史家ホイジンガ (J. Huizinga) の目に止ったのも，すべての出来事を行動から論じるパーク等の都市研究だった.[12)]

しかしマンハイムやゾンバルトは遠くヨーロッパにおいて，アメリカ社会学を垣間見たにすぎない．この意味ではアメリカ社会学のこうした特徴を身をもって感じとったのが，ナチズムの抬頭と共にヨーロッパからアメリカに居を移さなければならなかったフランクフルトの学者集団だった．フランクフルト学派の研究者達は，亡命先であるアメリカにおいて，さまざまな知的体験をするのである．だが，一口にフランクフルト学派とはいっても，当初から研究所の内部においてかなりの意見の相違が見られたばかりでなく，アメリカの社会研究の受け入れにあたっては，それぞれがき

わめて異なった態度をとるのである．後にアメリカ社会学の指導的立場を担うようになったラザースフェルト (Paul Lazarsfeld) とアメリカの社会研究に敵意さえ抱いていたアドルノ (Theodor Adrno) は，こうしたフランクフルト学派の両極をなすものであろう．

方法論というと認識論のことを意味していたアドルノにとって，方法論を調査技術として捉えるアメリカの社会研究は理解しがたいものであったばかりでなく，こうした態度そのものが，既に「批判理論」の対象となると思われたからである．社会的現実に対するアメリカの技術的・数量的研究とフランクフルト学派の社会哲学を指向した研究との間のギャップが，そこに存在するのである．

第二次世界大戦は第一次世界大戦にも増して，世界におけるアメリカの地位を決定的なものとした．アメリカは世界に圧倒的な影響力をもつようになるのである．かつて無理論的性格を指摘されたアメリカ社会学も，戦後パーソンズに代表される壮大な機能主義理論を生み出すにいたった．アメリカ社会学は今や質・量共に世界を凌賀するものとなったのである．世界におけるアメリカの地位は，世界におけるアメリカ社会学の地位であった．しかも大戦後創立された国連は各国がかかえる社会問題を，すぐれて実践的課題のもとに解決しようとしたのだった．アメリカ社会学は，この国連にも適合的な科学となったのである．

こうしたアメリカ社会学の全盛時代に唯一人アメリカ社会学を告発し続けたのが，ミルズ(Wright Mills)である．1950年代後半に彼は，今やアメリカ社会学の数量的研究に指導的役割を果していたラザースフェルトを「抽象化された経験主義」として，他方こうした微視的な調査研究の反動から生み出されたパーソンズの社会体系論を「誇大理論 (Grand Theory)」だとして批判するのである．とりわけ彼は，アメリカ社会学で模範とされてきた実用的観点から高度の調査技術を駆使して研究を進める，いわゆる科学的社会学者達に対して次のようにいう．「かれらは自分の職業として社

会調査を選んだのである．かれらははやばやと極度の専門化に没入してしまう．そして『社会哲学』―それらはかれらにとって『他の書物をつかって別の書物をかきあげること』であり，『たんなる思弁』でしかない―に無関心になり，それを軽蔑するようになる．かれらの会話に耳を傾け，かれらの興味の性質を検討してみるならば，そこに救いがたい精神の限界が見い出されるであろう．きわめて多くの研究者が，それに直面して自己の無知を思い知らされる社会的現実も，かれを悩ませることはないのである．」そして若い社会学者の将来は「かれが没入した一つの見方，一つの用語法・一種類の技術に大きく依存している．かれはそれ以外のことは何もしらないのである．」[13]

ミルズによって官僚のエートスから生み落されるとされたこうした社会研究の卓越した社会は，同時に経済学者バラン (P. Baran) とスウィージー (P. Sweezy) によっても，「教師や生徒が哄笑や微笑を用いることが，授業の効果にいかなる影響をおよぼすかを確認すること」・「ある種の衝撃限度を基準とする一三種のフットボール・ヘルメットの検定」・「ガーデン・シティ公立学校における幼稚園から第三学年用の学校備品の協同選択」・「とくにブロンクスヴィルにかんする学校キャンプ開設の指針」等の題名をもつ論文が，コロンビア大学やミシガン州立大学等によって教育学博士の称号が与えられる，独占資本主義社会の特質として捉えられるのである．[14]

アメリカの社会学会において，ミルズの主張は，1960年代前半まではまだ個人的なものにとどまっていた．しかし1960年代後半に「ラディカル社会学」「批判社会学」「反省社会学」等さまざまな名称をもっていい表わされる新しい社会学の運動に，大きな影響力をもつのである．若いアメリカの社会学者達はベトナム戦争激化のなかで，さまざまな現実的・知的刺激を受けながら，それまでの社会学を告発していくのである．

こうしたなかでグルドナー (Alvin Gouldner) は，ミルズによって官僚の

エートスから生み出され，バランとスウィージーによって独占資本主義社会の特質として捉えられたアメリカの社会研究の特質を，広く功利主義文化が直接·間接に社会研究に影響を与えたものだとして，アメリカの社会研究の無理論的性格の由来について次のようにいう．「『それ自身のための』社会理論とか，あるいは『純粋』な社会理論は功利主義文化のもとでは，いつも批判にさらされやすい．『理論』が社会科学のもっとも実用性の低い側面——すなわち〈たんなる〉理論として——みたされるかぎり，功利主義文化の社会理論はたえず理論なき経験主義へ向う傾向があって，諸問題の概念化は二次的なものになり，そのかわり測定，調査ないし実験計画，サンプリングないし実験器械装置の使用といった問題に，エネルギーを傾注する．こうして概念の真空がつくりだされ，研究の委託者・後援者研究資金提供者の常識的関心と実際的利害とによって，その真空が充填されがちである．このようにして，社会学はそうした人びとの利益に役だつようにさせられているのである．[15]」

たしかにアメリカの社会科学に対する資金援助のうち，そのほとんどすべてが世論調査や宣伝の効果あるいは商品に対する消費者の嗜好といった市場調査に使用されていることからみても，グルドナーの指摘はあながち誇張したものとはいえないだろう．さまざまなレベルでアメリカに知的インパクトを与えたフランクフルト学派もほとんど，その理論的な仕事には耳を傾けられなかった．受け入れられたのはフロム (E. Fromm) ウィットフォーゲル (K. Wittforgel) 等，むしろ研究所の周辺にいた人達であり，ラザースフェルトの数量的研究は若い研究者達の模範とされたのである．しかしアドルノやホルクハイマー (Max Horkheimer) の弁証法的批判理論はアメリカ人にとって，とても受け入れられるものではなかったのである．

## (五) 結　　論

おおよそ，以上のような性格を示すアメリカ社会学とりわけ都市社会学

から，ここでは〔一〕で設定した問題との関連で，本稿の一応の結論づけを行うこととしよう．

アメリカの都市社会学は日本の都市社会学に大きな刺激を与えてきた．むしろ日本の都市社会学は，アメリカ都市社会学の影響のもとに自己の都市社会学を確立していったのである．しかしアメリカ社会学は何よりもアメリカ社会思想の産物であった．

アメリカ人が理想としたのは，いわゆるジェファーソン的田園での農民的生活様式だったのである．彼らにとってこのアメリカン・ドリームを，その根底から切り崩すかに見えたのが今世紀に入って急速に進行しはじめた都市化であり，とりわけ第一次大戦後急に顕在化するにいたった都市での少年非行・売春・離婚・アルコール中毒等の社会解体現象だったのである．彼らは伝統的なアンティ・アーバニズムの観点から，これらの問題に取り組んでいったのである．しかし人種も文化も異なり都市の統治形態すら流動的な急激に発展するアメリカの都市においては，伝統的な思考を踏まえながらこれらの問題を扱うことは容易なことではなかった．ここに粗雑ではあるが，包括的な人間生態学理論がこれらの都市問題を解決する枠組として提唱されたのである．パーク等シカゴの都市研究者達は，これらの都市問題に文字どうり「体当り」(岡田真氏の表現）で，まったく新しい課題として取り組んでいったのである．人間生態学はそのための枠組をなし，実質的な問題は経験的な社会調査によって捉えられたのである．つまりシカゴ学派の都市研究は一方で人間生態学理論を構築し，もう一方では微視的な社会調査を指向していったのである．

しかしアメリカ社会学の研究は，あくまで実用的観点から行う個別の事例研究に，その重心があったのである．都市研究者達はこうした社会調査を通じて都市の理論構成に次第に批判的になっていった．都市研究は益々個別の事例研究を指向していったのである．こうして都市社会学はもっぱら実用的観点から，都市コミュニティに生じる日常的な社会問題に焦点を

あてていったのである．ここでは社会調査の経験性と，そこで得られる統計的資料の数量的処理が研究の要(かなめ)となっていた．とりわけ社会調査技術の習得は社会学的訓練の中核をなしていたのである．こうして都市はもっぱら調査を通じて把握されていったのである．つまりアメリカの都市社会学においては，都市調査の「技術化」の進展が都市の「理論構成」の代償とすらなっていったのである．こうした事態が，アメリカの都市社会学を広範に検討したフランスの都市社会学者カステルス (Manuel Castells) の「都市社会学は50年間にわたって存在し続けてきたが，問題の本質だけは未だに研究されないで残っている．」という告発の言葉となって現われているのである．

しかし一見理論なき盲目の調査のおびただしい集積とも思えるアメリカ都市社会学も，それが日常的関心からくる実際的な都市問題にかかわったところでは，都市社会学の存在をいささかも疑われるべきものではないのである．アメリカの社会学はあくまで人種も文化も異質なさまざまな人間が織りなす多様なアメリカ社会への対応によって生み出されたものであった．アメリカ都市社会学は，もっぱらこうした現実のアメリカの都市がかかえる社会問題に焦点を定めながら形成されてきたのである．

この異質なアメリカ社会に対して，わが国ではきわめて社会の同質性が高いのである．わが国の都市と農村の同質性については柳田国男以来しばしば指摘されたところであるし，わが国で日本人論がおりに触れてとりあげられるのもこの同質性のためなのである．したがってアメリカ都市社会学の無反省な導入によって，アメリカ都市社会学と同様の問題意識と調査技術を駆使してわが国の都市を研究してみても，われわれが既に暗黙のうちに了解していた事項にしか到達しないことがきわめて多いのである．われわれは各種の都市の事例研究において，調査技術に評価されるべきものを含みながらも，その結論は調査されるまでもなくわれわれが常識的に考えていた以上のものではなかった，という事態にたびたび直面するのであ

る．わが国ではこの文化の同質性のために，都市の理論構成を等閑視したままでの事例研究による事実発見はアメリカほどには期待できないばかりでなく，さほどの意味をもち得ない．われわれはその事実を，あまりにもしばしば暗黙のうちに了解してしまっているのである．必要なのは，それらの諸事実を理論的に説明することなのである．

しかし近年アメリカ社会学においてすら，あまりにも多くの研究が事例研究に向ってしまったことに対する反省が見られるのである．『アメリカ社会学雑誌』の編集者達を代表してビッドウェル (Charles E. Bidwell) は，近年あまりにも多くなってしまった事例研究を指摘しながら，事例研究以外の研究への熱意を投稿論文に要求するのである[17]．都市の社会学的研究に関していえば，都市社会学にとって事例研究が決して欠くことのできないものであることは当然であったとしても，理論研究を等閑視したままでの単なる事例研究の集積による社会的現実の解明には限りがあるだろう．ミルズはアメリカで記念碑的調査として高く評価されているウォーナー (Lloyd Warner) の都市研究に対してすら，「もしウォーナーがマルクス以後のヨーロッパ社会学の文献を，とくに私はマックス・ヴェーバーのものを指しているのだが，利用したならば，かれは自分が『発見』した事柄をもっと正確な形で『発見』したことであろうし，またもっといくつかのことを『発見』したことであろう[18]．」というのである．

それでも歴史の浅い急激に発展するアメリカの都市においては，社会的現実は原子化された個人の行動と，その生態学的属性の強調によってかなりの程度まで説明可能であった．しかしわが国にあっては長い間にわたって培われてきた歴史が，人間の行動に大きな意味をもってくるのである．わが国においては，アメリカの都市社会学が用いるような原子化された個人の行動はさほど大きな意味をもち得ないのである．否，アメリカにおいてすらアーバニズム理論以後，ワースの原子論的世界に集団論でもって批判してきたのである．パークやバージェスの人間生態学理論が徹底的に批

判されたのも，ファイアレー (W. Firey) によるアメリカで最も歴史の古いボストン市の土地利用の研究からであった．ホーリーの新しい人間生態学理論を用いて東京の現状分析を行った矢崎武夫も，「われわれは東京の現実を説明するためには，彼の理論の上に地理的・歴史的・心理的要素および都市と後背地の関係の3つの要素を加える必要がある.[19]」ことを指摘するのである．わが国の都市研究において，一方でマルクス主義がきわめて大きな影響力をもち続けるのも，人間がその社会的生活の再生産において,「一定の必然的な，かれらの意志から独立した諸関係を，つまりかれらの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する諸関係を，とりむすぶ.」ことに着目し，その歴史的状況を研究のなかに取り込んでいったからなのである．

都市社会学へのこうしたアメリカ社会学からの強い影響力に対して，わが国の社会学の数多くの研究分野のうちでも最も豊な成果を誇るといわれる農村社会学は，同じ地域社会学の一分野としてこのアメリカ社会学の影響をどのように受け止めたのであろうか．実際には，アメリカ社会学の農村社会学への影響は，初期の鈴木栄太郎に見られたにとどまったのである．第二次大戦後アメリカ社会学が怒濤のように流れ込んできた時でさえ，農村社会学においては導入への試みが盛んに検討されたものの，その直接的影響はあまり強くはならなかった．これにはわが国の農村社会学が，有賀・喜多野・鈴木等によって既に戦前に研究が方向づけられていたことにも増して，農村社会学者達がわが国の農村がアメリカの農村とはあまりにも事情を異にしたものであるとの認識をもっていたためであった．この点では農村社会学の側から，都市と農村を統一的に把握すべく「地域社会学」を構想するにあたって，蓮見音彦の「こと都市社会学の場合には，従来の方法論に対して根底的な反省を要求する契機ともなるのではないかと思われる[21]」との指摘は，都市社会学のかかえる現状を鋭く突くものだろう．わが国の都市社会学はあまりにも性急にアメリカ都市社会学を導

入してしまったのである．

もちろん，都市社会学の研究は社会的事実の経験的把握をその基礎に置くのであって，過去の文献の思弁に終始するものではない．しかしながら，単なる社会的事実の集積がおのずと都市社会学理論をつくるわけではないのである．アメリカの都市社会学はマーチンデール (Don Martindale) によって，その理論的危機が叫ばれているにもかかわらず，現在なお，新たな理論構成を行おうとする動きは目立っていない．ここに，アメリカの社会思想によるプラグマチックな都市社会学の学問的性格が顕著に現われていると共に，アメリカ都市社会学のもつ無理論的性格がアメリカにおいてすら都市研究に一つの行きづまりをきたしている時，日本における都市社会学理論の等閑視がもたらす研究上の帰結は，アメリカより一層深刻なものとなっているのである．

わが国の都市社会学が種々の点でアメリカ都市社会学に学ばなければならないことは，都市社会学の黎明期と同じであったとしても，アメリカの都市社会学は本稿で考察してきたように何よりも現実のアメリカ社会と，その都市に焦点をあわせて生み出されてきたものである．つまり現在日本の都市社会学が直面する危機の一端は，アメリカの都市研究を，それがもつ社会的背景を無自覚なままに，あまりにも性急に導入してしまったことにあるのである．

こうしてみると，都市社会学を社会学の一分野として，本稿で考察したアメリカの社会学思想から離れて，「普遍的な科学」として扱うことは，特定の思想的立場を取りさえすれば，常に科学的な研究が達成されるとする考え方と共に大きな誤りをおかしているといわなければならないだろう．現在のわが国の都市社会学にとって必要なのは，わが国の都市の現状を踏まえた都市研究であり，とりわけその理論研究なのである．[22)]

## 注

1) この点については，拙稿「都市社会学の理論的課題—都市社会学の理論的危機に関する考察—」『社会学評論』 二七巻，第一号，1976 有斐閣を参照してほしい.

2) Howard W. Odum, *American Sociology—the Story of Sociology in the United States through 1950—*, Longmans, N, Y., 1951, p. 152.

3) パークの人間生態学については，ヒューズ (Everett C. Hughes) によって編集された Robert E. Park, *Human Communities—the City and Human Ecology—*, The Free Press, N. Y., 1952, 参照のこと.

4) Robert E. Faris, *Chicago Sociology 1920—1932*, University of Chicago Press, 1970, p. 37.

5) Geoge A, Lundburg, *Social Research* 福武・安田共訳『社会調査』東京大学出版会 1952, p. 447.

6) Gideon Sjoberg, "Theory and Research in Urban Sociology" P. M. Hauser & L. F. Schnore (eds.) *The Study of Urbanization*, John Wiley & Sons, N. Y., 1965, p. 178.

7) Colin Bell & Howard Newby, "Theoretical Preliminaries to the Study of Community", *The Sociology of Community*, William Clowes & Sons, London, 1974, p. 3.

8) 金子清 『アメリカの地方自治』良書普及会，昭和44，阿部斎『アメリカの民主政治』東京大学出版会，1972, p. 96-120. 長浜政寿『地方自治』岩波 1952.

9) Louis Wirth, "Consensus and Mass Communication" Albert J. Reiss Jr. (ed.) *Louis Wirth on Cities and Social Life* University of Chicago Press, Chicago, 1964, p. 20.

10) Karl, Mannheim, "Book Reviews, Methods in Social Science by Stuart A. Rice", *American Journal, of Sociology* 1932, Sept., pp. 273-282.

11) Werner Sombart, "Siedlung, Stadt", 吉田祐訳「都市的居住」鈴木広編『都市化の社会学』所収 p. 50.

12) J. Huizinga, Wege der Kurturgeschichte, 磯見昭太郎訳「アメリカの精神」ホイジンガ選集. 5『汚された世界』所収 河出書房新社 pp. 216-217.

13) Wright Mills, *The Sociological Imagination*, O. U. P. 1959, 鈴木広訳『社会学的想像力』紀伊国屋書店 p. 139.

14) P. A. Baran & P. M. Sweezy, *Monopoly Capital*, 1966. 小原敬士訳『独

占資本』岩波書店 pp. 192-393.

15) Albin W. Gouldner, *The Coming Crisis of Western Sociology*, Heinemann, London, 1971, p. 82. 岡田・田中共訳『社会学の再生を求めて』1 新曜社 p. 104.

16) Manuel Castells, "Is there an Urban Sociology?" C. G. Pickvance (ed.), *Urban Sociology; Critical Essays*. Tavistock Publication, 1976, p. 59.

17) Charles E. Bidwell, A Call for Papers, *American Journal of Sociology*, Vol. 81, No. 6. May, 1976. P. V.

18) Wright Mills, *Power Politics and People*, 青井和夫・本間康平監訳『権力・政治・民衆』みすず書房 p. 49.

19) 矢崎武夫 「東京の生態学的形態」『都市社会学研究』所収 金文堂 1963, pp. 248-249,

20) Karl Marx, *Zur Kritik der politischen Ökonomie*,『経済学批判』武田他訳 岩波書店 p. 13.

21) 蓮見音彦「農村と都市」綿貫・松原編『社会学研究入門』東京大学出版会 1968, p. 96.

22) こうした観点から，地域社会学を構想したものとしては，拙稿「地域社会学の方法と構想—地域分析のための方法論的枠組に関する研究」星永俊・河田喬夫他『都市化と地域社会』時潮社（近刊）を参照されたい。